

同窓生の講演から

国内外の問題

参議院議員・元国務大臣総務庁長官

佐々木 満

今日は、この、大変懐かしい母校へお招き頂きまして、お元氣な後輩の皆さんとお目に掛かれますことは本当に有難いことでございまして、校長先生はじめ皆様方に厚く御礼を申し上げます。また同窓会長の神馬先生からは大変ご丁寧なご紹介を頂戴致しましたけれども、私はそんな立派な男でも何でもございまして、遊ぶことが好きで、酒も好きで、まあ本当によく今日まで生きてきたとびっくりしているくらいの人間です。先程からこの校訓（注―佐々木満先生揮毫の「至誠力行」の扁額が体育館に掲げてある）のお話を頂戴しております。私はこの体育館に時々邪魔するんですけれども、これを見ますと本当に恥ずかしい思いがします。取り外しておるんじゃないかと思つて、ここに入つて来ましたが、やっぱり掲げてもらつておる。自分の書いた字を見るつてのは本当に恥ずかしいもんで（笑）――しかも皆さん笑つていらつしやいますけれども、下手な字でございす。これは、その、本校六十周年記念のとき、同窓会長、神馬先生から、「書け」と命令されたんです。私は字が下手なものですから逃げ回つたんですね。何とか勘弁してくれ、と。ところが、この尊敬する

同窓会長から敝命が下りまして、しかも太い筆まで持つて来られてしまいました。ここまで来るとやはり、書かなきゃなあ、書く以上は校訓のように真心を持って力を込めて書こう、まあそういう決意を致しまして、何回も書き直しをして、やつと出来上がったのがこの字であります。目障りだと思ひますけど、もうちょっと掲げておいてもらえば有難いんですが、ひとつあまりこの字を見ないようにして、お話を聴き頂ければ有難いと思ひます。

私がこれからお話し申し上げる内容というのは、それは大した事ではありません。何か題がないといけないと言うんでこういう演題として頂きましたが、そんな立派な話ではございませんから、どうぞ、ひとつ楽な気持ちでお聴き願ひたいと思ひます。

よく最近、この、二十一世紀に近い、とこう言われます。全くあと十年ぐらいで二十一世紀になります。この二十一世紀というのはどういう世紀になるのか。どういう時代になるのだろうか。色んな人が色んなことを書いております。しかし正直なところ、どういふ二十一世紀になるか、誰も分からんだろうと思ひます。長い百年間が一世紀です。どういふ百年になるのか分からんだろうと思ひます。色んな予測をしております。こうなるだろう。ああなるだろう。しかし予測とか予想というのは、あんまり当たらないものなんです。天気予報、昔はズいぶん当たらなかったが、最近はいくぶん当たります。それでも外れることがある。一番予想が当たらないのは何だろうか。私は野球の気

違いですが、プロ野球の予想ですよ。毎年三月頃になりますと、プロ野球の解説者が、「今年はジャイアンツが一位、タイガースが二位……」と、こう皆予想しますよ。あれは当たった試しがない。今までのところ全く外れてます。大体予想ってのは当たらないと思って間違いない。現在は二十世紀。あと十年が二十世紀。二十世紀はいつから始まったかと言うと一九〇一年からです。日本で言いますと明治三十四年です。この二十世紀に入った年に、東京のある新聞社で「二十世紀はどうなるだろうか。この百年間で世の中はどう変化するだろうか。」こんな予測をもらったんです。ものを覚えている人たちに予測してもらった。色んな予測がございます。今、九十年経ってみて当たったものもありますけれども、全く当たらないものもあるんです。

当たった方を少々ご紹介しますと、「この二十世紀の百年間で電波というものが地球を縦横に駆け巡るだろう」とこう予想した人がありました。これは当たっていますね。別のある人は「東京と神戸間は汽車でもって二時間半で到着するだろう」とこう予想しました。これも大体当たっていますね。今、東京と神戸の間は新幹線で三時間十分ぐらいでしょうか。ですからこの予想はほぼ当たったと見ていいでしょう。「列車というものは全部冷暖房になる」とこう予想した人があるんです。冷暖房完備、これも当たりました。

さて当たらない方——「この百年間で日本から台風がなくなるだろう」と予測した人がいるんです。台風がなくなる。台風は来るけれども日本列島に上陸する前に台風をつぶす、とこういうわけです。ど

うやってつぶすかと言うと、台風には目がある。この目に向かって九州辺りから大砲を撃つ。そうやって台風の目を壊してしまふ。そうなるだろうと予想しました。が、これは当たりませんでした。一番おかしいのは、こういうのがあります。「人間と動物の間の会話が自由にできるようにする」とこう予想した人がいる。そうして、小学校には英語じゃなくて獣語という科目ができる。「獣語」というのは「けだもの言葉」で、動物の言葉を教える学科が小学校にできる。二十世紀には、猫とか犬、熊が自由に人間と会話ができるようにする。こう予想したのですが、皆さんどうですか、これは。私の家には猫がいます。しかし何を言っているのかさっぱり分かりません。もともと腹が減った時の鳴き声ぐらいは分かりますけれども、自由に猫と会話ができません。犬とも会話ができません。そして小学校には獣語科という、猫語を教える科目、犬語を教える科目ができる——そういう小学校ありますか、今。まあ英語を覚えるのも大変なところへ猫語までとなったら、これはとても覚えられません。そういう予測をした人がおるんです。予測というものはなかなか当たりません。まず当たらないと思って間違いないです。

しかし、これから百年のことを考えますと、明日のことは当たらないけれども、百年後を考えてみますと当たりそうなこともあるわけです。私は今日は、二十一世紀はこうなるだろう、その中で大体間違いないと思うことを二つだけ最初に申し上げてみたい。その一つは科学技術が非常に進歩する。そしてこの科学技術をどう使うかというこ

とで人間が非常に悩む時代が来るであろう、ということでもあります。

科学技術と人間の関係、こういう重要な課題、これに人類は当面することになる。これが一つ。

もう一つは、ご承知のとおり国際化がますます進む。この二点は間違いないのではないか、私はこう思っております。

皆さんにはご家庭でもどこでも、テレビはある。洗濯機もある。冷蔵庫もある。車もある。コンピュータもある。——大変便利な生活をしておるわけであります。しかしこういう生活ができるようになったのは実に最近のことです。三十年前、四十年前、ええ私が昔の能代中学、樽子山に通っている頃は、車はない。車を持っているのは本当の金持ちだけ。テレビは全くない。テレビができたのは昭和二十八年で、我々がそれを買うようになったのは三十二、三年頃です。冷蔵庫はない。ビールはどうしたかと言うと、氷のブツカキを買ってきて冷やした。あるいは深い井戸水を汲んで、お客さんが来るという二時間ぐらい前から冷やした。洗濯機がない。ですからお母さん方は本当にこの洗濯で苦労したんです。

昭和十九年、私は能代中学の五年を卒業したんです。その年の卒業も近い二月十五日のことでした。夜中にあの樽子山の学校が焼けたんです。全焼した。ちょうど試験の前の日でした。私は当時住吉町に住んでいましたが、試験勉強をして、そろそろ寝ようというので玄関を出て、まだ雪がありましたけれども、そこで深呼吸をしておった。十二時頃です。そうしたら私の家から見て南の方の空が真っ赤に燃え

ている。そして人がどんどん走って行く。樽子山だ！ 私も走って行った。そうしたら母校が燃えている。さあ大変だ、ということでも雪の玉を作って投げつけたりなんかしましたけれども、そんなものは効き目がない。全焼してしまいました。まだ煙が出ておる。それで私は朝まで、寒いところですけども、火が燃え移っちゃいかんということ、先生方と一緒に警戒しておりました。朝になった。そうしたら五能線で通学している生徒、これは火事があったということを知らないです。学校の前まで来て、学校が燃えてしまったことを知ってびっくりした。そういう時代ですよ、私が皆さんと同じ年頃は。ラジオなんて金持ち以外は持っていないんです。ですから五能線の人は学校が焼けたことを知らない。知らないで汽車に乗って来た。今はどうです。地球のどこで何が起ころうとも、すぐその日のうちに我々の耳や目に入ってくる。大変な科学技術の進歩であります。私は、この科学技術というのは二十一世紀に入って更に進歩するだろう。どこまで進歩するか分からない。どういうものが科学技術によって現れてくるか分からない。これが二十一世紀だろうと思います。

皆さん、バイオテクノロジーという言葉聞いたことがありますか。これは専門家の神馬先生（注）現能代高校同窓会々長。この記念講演の講師紹介をして頂いた）がここにいらっしやいますから、これからの話はちょっと話にくいんですが、もし間違っておったら、今日ではなく、いつか直しておいて下さい。（笑）、今日直されますとこれ、恥をかくことになりますのでいつか直して頂きたいのですが……「バイ

オテクノロジー」これは難しい言葉で言うと「生物工学」とも言うそうです。要するに、生物学、医学、こういうものに工学的な知識を応用する学問だと、難しく言えばそう辞典には書いてあります。この「バイオテクノロジー」というのが進歩して行きますとどうなるか。

農業が変わりますね。つまり好きな農作物ができるんです。今、県では大潟村にこの「バイオテクノロジー」の研究所（生物資源総合開発利用センター）を作りました。この研究が進むと好きな作物が作れます。畜産、これに適用しますと好きな牛、好きな豚が作れます。そうなります。これは人間にも適用される。人間に適用されれば好きな人間が作れるんです。我々の体には沢山の遺伝子がある。この遺伝子の立派なものだけ自由に組み換えをしますと、立派な人間が作れることになる。この遺伝子の組み換え、ということで人間も自由自在に作れるんです。ですから私みたいな人間は、同じ人間を何人も作り出すことができます。作ろうと思えば校長先生のような立派な方々は別として、平凡な人間だったらすぐ作れる、こういう時代なのです。これが二十一世紀です。

ところで皆さん、核兵器というのを知っているでしょう。それからイラクで戦争で問題になった生物化学兵器、知っているでしょう。この核兵器、生物化学兵器というのもこれも科学技術が進歩したからですね。昔はこういう物はなかった。ですからこれからは、人間を自由に作ることもできる。それから人間を一辺に何万人も殺せる。そういう物を作れるんです。これが二十一世紀です。そういうことで科学技

術というのがどんどんどんどん進んで行く。そうなった場合にこれをどう使うかというのが二十一世紀の一番の、これは大きな問題だと思います。

科学技術というのは、人間の幸福の為にこれは使われなければならない。人間の不幸の為にこれを使っただけでは人類は滅亡する。それだけもう科学技術が進歩する。これを正しく使う。誰が使うかというそれは人間が使うわけです。ですから二十一世紀というのは、この科学技術の時代。使い方を間違えば、人類は滅びる。正しく使えば人類は幸福になる。どう使うかという大変重大な岐路に立たされる。これが二十一世紀ではないかと、私は思っております。

皆さんは、今大変流行の作家で渡辺淳一さんという方をご存知でしょう。色んな小説を書いている。この渡辺淳一という人は北海道のお医者さんなんです。二十年ほど前に小説家に転向した。私はこの先生からお話を聞いたことがあります。なぜ小説を書き出したかという、ある重大な事件に不安を覚えたからだそうです。どういふことかと申しますと、二十年ほど前に札幌医科大学で心臓移植の手術が行われたんです。心臓の弱い人の心臓を取って、丈夫な人の心臓を移した。成功した。二ヶ月ぐらいで亡くなりましたけれども、この話題はある意味で大きなショックを与えた。

この心臓移植というのを見ておまして、渡辺さんは考えたそうです。これは大変な時代になるぞ、と。これは大変だという不安を覚えただんだそうです。どういふことかと申しますと、私は心臓が弱い。こ

のままだと私は死んでしまう。誰か心臓の丈夫な人から心臓を移してもらえば、私は生きられる。そういう立場に立った場合に人間というのは儚いもんです。脆いもんです。どういうことを考えるかと申しますと、「誰か俺に心臓をくれる人はいないかなあ」こう思う。誰の顔が浮かぶかというと、まず親戚の顔が浮かぶ。あの男は心臓が強そうだ。あの心臓をもらえば俺は生きられる。こういうことを考える。次には誰を考えるか。同級生を考える。あの同級生のあいつはマラソンの選手だ。心臓は丈夫なはずだ。あの心臓を俺がもらえば俺は生きられる。こういうことを人間は考える。浅ましい。そういうことになったら一体どうなるのだろうか。これは人間の社会だろうか。人様の心臓を持ってきて、自分だけが長生きをする。こういうのが人間社会だろうか。彼はそういう点で非常な疑問を持ったそうです。

皆さん、この、脳死という言葉が最近新聞に時々出ます。脳、頭が死ぬ、この脳死。人間というのは心臓が止まれば死んだと、今はこう……言われています。死亡の時期というのは心臓の止まった時点だ、と。ところが心臓が動いていても脳が死んでいる場合があります。これを脳死と言います。脳が死んでしまったら心臓が動いていても人間でないのではないか。動物的な生存ではないか。人間の権威の為に、人間の尊厳の為に脳が死んだら人間としての死亡だとすべきじゃないかという意見があり、またそうではないとする意見もあり、これは大変に難しい問題です。

人間の死亡の時期というのは何時か。脳死の段階か、心臓の止まっ

た時か。これはもちろん医学の問題でもあるが、また倫理の問題でもある。宗教の問題でもある。あるいは法律の問題でもある。人間が生きてるか死んでいるか。これは非常に法律的に重要な分岐点をなす問題であります。そういうことで政府でもこの問題を今、真剣に検討して、近く何らかの結論が出ると思います。脳死だ、しかし心臓が動いている。もし脳死が人の死だということになりますと、その人から動いている心臓を持って来て、それを人様に移すことが法律上可能になります。しかし心臓の悪い人が沢山いて、脳死で心臓を提供できる人が少なかった場合どうなるか。ここでもやはり心臓の奪い合いが始まります。こういうのは医学の面から申しますと、非常にこれは高等に発達した医学、科学技術ですがこのようなことがどんどん見境なしに行われると人間社会は一体どうなるのか。これが私の本日申し上げることの第一点であります。結論は今日私は申し上げません。科学技術というのはどんどん進歩する。その科学技術をどうやって使うか。使い方を間違うと人類に不幸をもたらす。あるいは人類の滅亡をもたらす。これを正しく使うか使わないか。この分岐点に立つのが二十一世紀であります。どうかこういうことを一つ皆さんの頭の中に入れておいて頂ければ私は大変有難いと思っております。この具体的なこと私は申し上げませんから、皆さんの方でこれからの長い人生の中で考えていつて頂ければ結構だと私は思います。

もう一つは国際化という事です。これからどんどん国際化が

進む時代、これが二十一世紀であります。これもまた結論は申し上げませんが、私は世界というのは複雑なものだ、我々日本人が考えているように単純ではない、誠に複雑だ、とこういうことをちよつと申し上げてみたいのであります。

皆さん、世界に国がいくつあると思いますか。これは数えようによつて色々違いますけれども、大体一七〇ぐらいじゃないかと思っています。国際連合に加盟しているのが一六〇ぐらいと言われています。人口がまずまるで違うでしょう。これは二、三年前の国連の調査ですけれども、一番人口の多い国は中国、一一億といえますけれども、これはもっと多いだろう。二番目はインド、八億、これももっと多いだろうと言われます。三番目がソ連、二億八千万人。アメリカ、二億五千万人。インドネシア、一億八千万。ブラジル、一億五千万。日本が一億二千万から三千万弱、とこういうところですよ。日本は七番目です。少ない方はどうでしょう。一番少ない国は七五七人しかいないんですね。これは有名なバチカンという国です。二番目に少ない国はナウルという国、南太平洋の赤道の近くにある。八千人の人口で、総理大臣もいますよ、ここには。ツバルという国、やはり南太平洋の国で九千人。サンマリノというイタリア半島の中にある国は二万三千人。リヒテンシュタイン、ヨーロッパのスイスのそばにある国ですが、これが二万七千人。有名なモナコ、大変お金持ちのモナコ、二万八千人ぐらいしかない。このように人口を見ても世界はまちまちです。

面積を見てもご承知のとおりまちまちですね。経済の力も、生活水

準も、物の考え方も、生活の仕方とも皆まちまちです。皆日本人のような生活の仕方をしてるかと思うとこれは大きな間違い。世界全体から見ると、日本人の考えとか、日本人の生活とか、仕方、こういうのはむしろ例外と見た方があるいはよいのかもしれない。大変複雑です。今日、世界を複雑にしている問題が沢山ありますが、三つだけ申し上げてみたいと思っています。一つは民族問題、そして宗教問題、最後に国境問題、この三つだけ少しお話をしてみたいと思います。

世界には沢山の民族があります。日本のように大和民族というのでしょうか、日本民族、そして日本語、秋田弁と鹿児島弁の違いはありますけれども、皆日本語を話して仲良く暮らしている国というのは例外中の例外なんです。日本だって歴史を辿れば色々な民族がおったと思います。色々な民族がこの島へやって来たかと思ひます。あるいは今日だって日本民族の外に色々な民族がやって来て、その子供さん、お孫さん、皆日本語を話して仲良く暮らしている。決して一つの民族国家ではありませんけれども、まあ日本はそういうことで日本民族を中心に、一つの言葉を話して仲良く暮らしている。ところがこれは例外なんです。

例えばソ連。この国は民族が五〇か六〇、数えようによっては一〇の民族があると言われています。それぞれの民族の言語を持っています、共通語としてロシア語を教えている。こういう国です。皆さん新聞でよく見るでしょう。ロシア人。ロシア人というのはイコールソ連人ではない。ソ連人というのはないんですよ。ソ連という国にあるの

はロシア民族、ウクライナ民族、あるいは南の方のアルメニア民族、ヨーロッパの方に行くとエストニア民族だとかラトビア民族だとか、そういうものが全部合体してソ連の人、とこうなっているわけです。ソ連という国の中では共和国が一五ある。これが皆民族が入り組んで生活している。今まで中央（権力）がガッチリ抑えてきましたけれども、ゴルバチョフ氏が出て来てから、民主化だ、自由化だということ で各民族が声をあげ出した。「俺の方は独立したい。」「俺の方はロシア民族に圧迫されてきた。」——ロシア民族に言わせると「ロシア民族は他の民族の為の犠牲になってきた。資源でも何でも全部他の民族の為に使った。」こういうことで民族問題が非常に深刻になって来ました。

アメリカ、ここはどこ民族でも入って行ける、入ってもらう、多民族国家です。多民族国家としては、私は、アメリカという国は割合うまくやっているとありますよ。しかしご承知のとおり黒人問題という大変深刻な問題があります。中国にも沢山の民族がある。最近新聞で、クルド人という言葉を見たことがあります。イラクの問題で出てくるクルド民族。このクルド民族というのは五つの国に分散しています。イラク、イラン、トルコ、シリアあるいはソ連の南部、この辺りへクルド人というのが分散しておる。歴史上、このクルド民族というのはまだ自分たちの国をつくったことがないわけです。これが今あちこちで騒ぎを起こしているわけです。イタリア半島のつけ根のところにユーゴスラヴィアという国がある。聞いたことあるでしょう。

このユーゴスラヴィアはこれまた大変なんです。もちろん一つの国家をつくっていますよ。が、民族が五つある。言葉が四つある。宗教が三つある。文字が二つある。これがユーゴスラヴィアです。ですから最近色々新聞に出てますでしょ。独立したいとか、うちの民族はユーゴスラヴィアから離れたいとか、色々やっている。それからパレスティナ問題というの聞いたことあるでしょう。これはまた大変な問題なんです。ユダヤという民族がある。このユダヤ人という民族は昔、新バビロニアが攻めて滅ぼされるまで、二千年くらい前までパレスティナという土地に住んでおったんですね。ところが滅ぼされて、そこから追い払われてしまった。それから二千年間、ユダヤ人は世界を彷徨っているんです。百カ国以上に、このユダヤ民族が分散している。皆さんも名前を言えば分かりますけど、ユダヤ民族というのは非常に優秀な民族だ。学者でも、経済人でも、大学者でも、物理学者でも、大変立派な人が多い。歴史上でも、また今日でもそうです。それが世界中に分散しております。そして各国で虐められている。特にこの前の第二次世界大戦ではソ連、ドイツ、ここでユダヤ人が大量に迫害されました。特にドイツでは何百万という人々が、何も悪いことしないのに殺害されました。ユダヤ人というだけで殺された。ですからユダヤ人は世界中を彷徨っていますけど、何とか自分たちの国をつくりたい。これは二千年来の念願です。色んな経過、これは省略しますが、やっと昭和二十三年、一九四八年に自分たちの国をつくった。これがイスラエルという国です。どこへつくったか。これは二千年前に祖先

が住んであった場所、パレスティナにつくりました。それで自分たちの国ができたというので、世界各地からユダヤ人がイスラエルに集まった。ところがそのパレスティナの地というのは無人の地ではなかった。そこには二千年間、アラブ人が住んでおったわけです。そこへユダヤ人が来て「ここは二千年前はうちの先祖が住んでおったんだ、出て行ってくれ。」「いや二千年前はそうかもしれないけれど、二千年間我々が住んでおったんだ。」アラブ人がそう言った。出て行け、出て行かない、こういうことで争いが始まった。これが中東戦争というやつです。これは、これからも長く尾を引く非常に難しい問題であります。この民族問題というのが、これからの世界を考えていく場合に大変大事でありまして、今日は詳しいことは忘れてしまつて結構ですから、民族問題がある、ということだけ覚えておいて頂ければそれで結構であります。

二番目は宗教問題。日本人が外国人と会いますと、あなたの宗教は何か、ということをよく聞かれるんです。私なんか「無宗教だ」こう答える。これが外国の人には分かりにくい。無宗教の人があると思つてないんですよ、外国人は。日本という国は宗教というものに寛大です。緩やかですよ。皆さんご承知のとおり、皆さんの家には神棚があるでしょう。仏壇もありますね。ま、クリスチャンの方は別ですけれども。結婚式は神さまの前でやる。神道でやります。葬式はお寺で、仏教でやる。これが日本人に多いやり方です。こういうやり方をする国は世界に例がない。

外国は宗教に非常に厳しい。一つの宗教を信じたら他の宗教は敵。まあ敵だというのは大げさですけども、非常に宗教というものに厳しい。日本人のように家の中に仏教と神道を掲げてる国はありません。しかも十二月の末になるとクリスマス。クリスチャンでもないくせにクリスマス・イヴだということでお祝いして騒いでいる。こういう国もない。日本は宗教というものに非常に寛大だ。みんな仲良くしてるんです。仏教の人もクリスチャンも仲良くしている。こういう国は珍しい。

宗教の中にも色々あります。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンズー教……その他何百何千と宗教はある。そのどれかを信じてるんです。同じキリスト教と申しまでも、これもまた分かれていて。ご存知のとおり、カトリック、プロテスタント、こう分かれていて。そのカトリックもまた分かれていて。ローマ・カトリック、ギリシア正教、こう分かれていて。イスラム教もそうです。イスラム教のスンニー派というのがある。これは大体イラクに多い。シーア派というのがある。これはイランが多い。このスンニー派・シーア派もまたそれぞれ分かれていて———こういうことです。この、一つの宗教を信じてる人達が沢山の国にまたがっていることが一つ。もう一つは国の中には別々な宗教を信じてる人たちが沢山いる。これが世界を非常に複雑にしておるわけであります。

三番目に国境の問題———。日本人は四方海に囲まれていますから、国境問題というのにあまり敏感ではありません。先だって、北方領

土問題で、大變国民の皆さんに関心をお持ち頂きましたが、一般的に申せば国境というものにあまり関心がない。他の国は違うんです。隣りがすぐ他国ですから国境というものに非常に敏感です。ヨーロッパ、あの地図で小さい所、あそこに三百の国がありますよ。隣はすぐ他国。その国境が押されたり、押したり、そうして人為的に国境線が引かれる。川があるわけでもない。山があるわけでもない。人為的に描かれる。そしてそれが人為的に変更される。押したり、押されたりです。こういうことです。ですから国境問題というものに非常に敏感です。今のイスラエル問題、これも国境問題であるわけでありすけれども、大變な問題です。

世界にはそういう民族問題がある、宗教問題がある、それから国境問題がある。日本のように、こうやって平穩に暮らしている、そういう国ばかりではない。こういうことを皆さんには、是非覚えておいて頂きたいと思います。

先程イスラム教ということを申し上げた。このイスラム教を信仰する人はどのくらいいるか。これは世界の三大宗教の一つですけれども、大体七億人とか十億人とか言われています。このイスラム教を信じる人たちには守らなければならない義務が二つあるんです。沢山ありますけれども、重要なのが二つある。その一つは毎日五回、「メッカ」というサウジアラビアの聖地の方に向かってお祈りをしなきゃならない。毎日五回。それから一年のうちに一カ月間、毎年断食をしなきゃならない。断食というのと正確ではありませんけれども、朝太陽が出て

から沈むまで物を食べない。水も飲まない。生睡が出たら生睡も飲んじゃいけない。こういう生活を「ラマダン」と言いますが、これを一ヶ月間やらなきゃいけない。これが二つの重大なイスラム教徒の義務です。我々日本人は、あるいは西洋人は、ああいう生活をしておったんでは、あのアラブの人たち、砂漠の人たちは生活が向上しないだろうなあ、国も近代化しないだろう、生活水準も上がらないだろう、不便だろう、こう思います。しかしそれは日本人とかアメリカ人とかヨーロッパ人がそう思うのであって、アラブの人たちはそうは思っていない。いつかサウジアラビアの大臣が日本にやって来た。そして晩餐会でこういうことを言った。「私は田舎者です。従って新幹線が走っている日本に来てびっくりしております。」こういう挨拶をした。これはどういう挨拶か。本当にびっくりしたのか。日本にはいい国だなあ、と思ったのか。あるいは日本という国は物資だけ大事にするじゃないか、心のない国民だ、こういう皮肉を述べたのか私には分かりませんが、けれども、単純にこれは褒められたと思って聞いてはいけない、こう私は思います。

イラクの隣にイランという国があります。これは十年前に革命が起こって王様が追い出された。この王様は石油を売ったお金でもって国を近代化しようとした。これに対する反発で革命が起こって追い出された。ホメイニという指導者が現れた。ホメイニというのはこういうことを言った。「歴史を四百年元へ戻せ。歴史は進み過ぎた。四百年前、中世の時代が人間が一番幸せな時代だった。中世へ戻ろう。」と、

こういうことを言った。つまり、砂漠の中で貧しくても不便でもよろしい。我々は神を信じ祖先を敬って慎ましく暮らす方が人間の幸せだ、とこういう考えなんです。

こういう考えの民族、国民も沢山おるということを我々は知らないわけでありませう。かわいそうだと思って「お祈りをやめなさい。ラマダンをやめなさい。」こういうことを押し付けることはいけない。確かにああいう砂漠の国に工場を作って、流れ作業、例えば自動車工場の流れ作業、その時、突然お祈りをされたんじやあ生産が上がらない。断食をしてふらふらの人間が来て機械を動かされたんでは経済はうまくいかない。だからと言ってかわいそうだ、やめさせた方がいい、と思うのは間違いだ。これは我々日本人の考えであって向こうには向こうさんの考えがある。我々はこういうことを忘れてはならない、こう思います。

国際化というのは何も世界が平等になることではありません。世界の民族、世界の人たちがそれぞれの文化を持って、それぞれの伝統に立って、そうしてその上で皆が仲良くするのが国際化であります。従って、日本人は、国際化の時代だからと言って世界人みたいな人間になったら、これは世界の軽蔑を招くだけです。日本には日本の文化がある。そういうのをきっちり踏まえて、自分は日本人だ、日本人のものの考え方はこうだ、生活の仕方はこうなんだ、ということ堂々と主張し、相手の考え方も相手の生活の仕方も認めて、その上で仲良くすることが私は本当の国際化の時代だ、こういうふうに思っている次

第であります。世界は色々複雑だ、ということだけ覚えて頂いて、これから長い人生で色々なものを考え、勉強して頂きたいと思えます。

次に私は先輩として、皆さんに二つばかりお願いを申し上げます。次は私に先ず第一番目は、私は自分が六十何年の人生を振り返ってみて、自分の人生で一番嬉しかったことは何だろうか、一番有難いことは何だろうか、一番尊いことは何だろうか、こういうことを考えています。結局、私は二つのことに尽きるところで思っておるんです。それは、一つは学校に入っている時代に立派な恩師の先生を持つことができたことが一つ。同じく学校の時代に友情が厚い同級生、友だちを持ったこと、これが一つ。この二つに私は尽きるところで思っております。私はこの二つ、この二つは自分の人生の宝だ、とこう思っております。学校という所はもとも勉強する所だと思えます。しかし勉強というのは学校以外でもできます。今は生涯教育と言いまして一生勉強しなくてはならない。学校に入って勉強する、学校で生活をするこの意味を考えてもらいたいと思います。学校でなければ得られないものがある。あるいは学校では得易いものがある。それは何か。それは立派な恩師の先生と毎日接触をして、そして先生方と心の闘い、心の競り合い、心の鍛え合い、そういうものを試みる。あるいはこれだけの友だちが、同級生・先輩がある。この中で友だちを作る。これが学校生活の一番有難いことです。私は自分の人生を反省してみ、ああ立派な先生を頂いた、あの先生にお世話になった。

この恩師の先生に対するこの気持ち、それから同級生の友情、これが私を支えてくれた。今も支えている。これからも私の魂を支えてくれる。だから私はこれが宝だ、とこう思っております。友だちなんていうのは社会に出てからも作れます。しかし社会に出てからできた友だちというのは利害関係で結ばれがちですから、利害が反すると友だちでなくなることが多い。全部が全部そうじゃありませんけども、そうなりがちです。学校時代にできた友だちというのは、どんなに利害が反しても変わりません。私は今、政治家をやっている、自由民主党です。私の友だちには社会党の人もある、共産党の人もある。選挙になれば命懸けで戦いますよ。しかし、それによって友情は壊れない、なぜか。それは学校時代にできた友情だからですよ。これが学校時代にできる友だちの有難さですよ。だから私はこうやって立派な先生を頂いて、そうしてこうやって皆一緒に生活していることができる。是非一つこの、この時代を有意義なものにして頂く、友だちも作る、先生のところにつづかつて行って、本当に魂のこもった修業をさせてもらう、そういうことを是非私は心掛けて頂きたいなあと、こう思っております。私は時々能代へやって参りますが、昔私の通った学校は樽子山にありました。あの辺りをよく散歩致します。私はあの辺を歩いて、いつか桜の花を見たことがありますが、あの辺を散歩しますと、本当に胸が熱くなります。それはなぜかと申しますと、私はやっぱり私なりにあの樽子山の場所で青春の情熱を傾けた。そういうふうに私は信じております。ですからあの辺に参りますと胸が熱くなる。私は野

球部だった。能代中学、能代高校、最近では野球が強い。私の時代は能代中学、能代高校の歴史の中で一番弱い時代でした。私はそれを知っていました。知っていましたけれども、命を懸けて練習をすれば必ず甲子園へ行ける、こう確信しておりました。まあよく負けました。もちろんたまには勝ちましたけれども、よく負けた。負けても勝っても先輩、後輩、同級生一緒になって監督さんを囲んで肩を組んで歌を歌う。そうして涙が出る。そういう生活を五年間やっておりました。私はいつかこういう歌を作った。これは自分が作ったんじゃない、ある学校の歌を借りてきて、都合のいいように替えた歌なんです。

勝ちては君の胸に泣く 敗れて運命さだめよ恨みなく

樽子の山に住み慣れて 涙にもろき児となりぬ

こういう歌を作って口ずさんでおりました。私は涙を流せ、とか泣きなさい、ということは申しません。何でも結構です。勉強でもクラブ活動でも何でもいいから、感動のある生活をしてもらいたいものだ、とこう思います。永久に心に残る、感動のある高校生活を送ってほしいなあ、こういうことを私はお願い申し上げておきます。

最後に皆さんには是非読んでもらいたい本を二冊紹介しておきたいと思ひます。この二冊の本を読んでくれるならば、今までの話を全部忘れてもらっても結構です。是非ひとつこれを買って読んでもらいたい。一つは岩波文庫の中にあるんですけれども、『君達はどう生きるか』という本です。これは、題目は非常に堅い題名ですけれども中身は小説ですよ。これは昭和十二年頃作られた本で、吉野源三郎という大

変な偉い先生がおられた。この先生が書いた本です。昭和十二年、戦争の最中に書いた本ですけれども、今読んでみても全くこの本は通用する。こういうのを「不朽の名著」というんでしょうね。私はこの本は、昭和十九年能代中学を卒業する時に恩師の先生に貸して頂いて大変感激したことがあるんです。十二、三年前にこの本が岩波文庫から出されました。これは友情というものの尊さ、友だちとの魂の交流の中に悩み、喜び、そういうものを書いた小説です。大体中学校の二年生、三年生を対象にして書いた本です。これを先だって読んでみて、全く新しい感動を覚えました。五百円ぐらいです。是非ひとつ買って読んで下さい。

もう一つ、皆さん山本有三という作家をご存知ですか。昔の人ですよ。『真実一路』だとか『路傍の石』だとか『女の一生』だとか、こういうものを書いた大変な作家、文学者、哲学者ですよ。私が今日、読んでもらいたいのは、この山本有三の『心に太陽を持って』という本がある。これも昭和十年頃の本です。ところが最近これは新潮文庫が出しました。五百円ぐらいです。これも是非読んでもらいたい。これは人間というのはどう生きるべきか、堅苦しい話でなくて、楽しい、優しい話を二十ばかり集めた、これも中学二年生ぐらいを対象にした本です。この本を是非買って読んでもらいたい。この『心に太陽を持って』という本の一番最初に歌が書いてある。これは外国人の作った詩、これを翻訳したわけですけども、今日はこれだけをちょっと読みますから、後は買って読んでもらいたい。こういう詩なんです。

一、心に太陽を持って 嵐が吹こうと 吹雪が来ようと

天には黒雲 地には争いが絶えなかりうと

いつも心に太陽を持って

二、口びるに歌を持って 軽く朗らかに

自分の務め 自分の暮らしに

よしや苦勞が絶えなかりうと

いつも口びるに歌を持って

三、苦しんでいる人 悩んでいる人には こう言って

励ましてあげよ 勇気を失うな

口びるに歌を持って 心に太陽を持って

この詩がこの本の一番最初に書いてあります。どうぞこの二冊の本をどうか買って、やっぱり本は自分で買うんですよ、自分で買ってひとつ是非読んで頂きたいなあ、こう思っております。

大変長話を申し上げましたけれども、以上で私のお話を終わります。どうぞひとつお元気で頑張ってください。ありがとうございました。

(平成三年六月三日(日))
本校体育館にて